

実習教育と「まなびあい」

赤畑 淳

(帝京平成大学健康メディカル学部臨床心理学科講師／元福祉学科教員)

昨年度末に立教大学を退職して、約半年が経とうとしている。在籍していたのがずいぶん昔のように思えるが、立ち止まり振り返ってみると、まるで昨日のこのように思い出される。それほど濃密な4年間だったのだと思う。

私が立教大学コミュニティ福祉学部に助教として着任したのは、東日本大震災直後の2011年4月。その年は震災の影響で入学式はなく、授業開始が連休明けという異例の年でもあった。初めて常勤での大学教員職ということもあり、初年度は戸惑いの連続であった。

大学教員になる前、私は東京都内の精神科病院でソーシャルワーカーとして働いていた。立教大学とのかかわりは、その頃に現場実習を受け入れていたことにはじまる。立教大学の卒業生が私の勤務先に就職したこともあり、当時精神保健福祉士の実習を担当されていた尾崎新先生から現場実習を依頼され、実習指導者として数年にわたり実習生を受け入れていたのである。その関係もあり、毎年大学で開催される「実習報告会」に出席させていただいていた。そこでは学生一人ひとりが実習にじっくりと取り組んでいる姿に感銘を受けたと同時に、教員も丁寧に学生と向き合っているという印象を強く持っていた。

その立教大学で実習教育を中心に携わることができるという好機が訪れたとき、本当に嬉しく思った。丁度、入職した年度が、前年の精神保健福祉士法改正を受け、新カリキュラムや実習手続きなどを行う必要がある時期であり、情報収集及び事務業務に翻弄されたことが思い出される。振り返るとこの業務は実習体制の全体像を把握する意味でとても貴重な経験となった。精神保健福祉士の実習指導や演習等では、杉山明伸先生のバックアップのもと、中心となって授業を担当させていただいた。精神保健福祉領域の実践現場を中心に、人との関係を基盤とする支援において自己理解の大切さと、現場の事象を個別的な視点のみならず、全体の状況性も踏まえて考えることの重要性を伝えることを意識していた。在籍4年間の実習報告集を読み返すと、当時の自分の思いが綴られている。初年度に実習教育の難しさと奥深さを実感し、2年目は試行錯誤のなか学生と共に考え、3年目には考え続ける力を育むことの重要性に気づき、4年目にはソー

シャルワーカーのアイデンティティを精神保健福祉士の実習教育でいかに伝えられるかに奮闘していた。講義科目でも同様に現場を経験している教員として、理論と実践の往復を常に意識した授業展開を心掛けていた。

実習教育と並んで思い出されるのは、本学会誌「まなびあい」である。実はこの「まなびあい」も、立教大学着任前、実習指導者として実習報告会に行った際に配布され、大きなインパクトを受けていた。学生・卒業生・教員が学びあう場と機会を大切にするという、大学（学部）の雰囲気が如実に伝わってきたからである。着任後は第5号～第7号まで、例年「まなびあい」に投稿させていただいた。特に第6号「地域における精神障がい者フットサル活動がもたらすもの～障がい者と学生との交流体験からみる可能性」、第7号「実習教育と現場実践をつなぐ～卒業生の『あの頃』と『今』」は、卒業生（1期生）との共同執筆である。共同での執筆作業を含め、卒業生との交流を通して、立教大学で学んだことを基盤に現場で活躍している人たちに多くの刺激を貰った。

今改めて振り返ると有期限の助教という立場ゆえに多くの先生方の教育実践に様々な形で触れることができたことは、とても貴重な時間であり経験であったように思う。さらに、「福祉実習教育室」配属ということもあり、他の助教の先生方と時間や空間を共にすることが多く、実習教育（室）体制をめくり議論したことも思い出深い。福祉実習教育室の助教の先生方とは同僚という関係以上に、仲間という意識があり、年齢を重ねてもこのような体験ができたことを嬉しく思う。

退職から半年、立教大学を離れてみて感じることは多くある。現在の研究室には、4年間の「実習報告集」と「まなびあい」が並んでいる。大学教員としてのスタートを切った立教大学の経験は、今後の私の教員生活の礎になることは間違いないだろう。4年間の在籍中にお世話になった教職員や学生、卒業生の皆さま、現場実習でご協力いただいた皆さま、本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。